2014 年度来日プログラム日程

本年度の来日プログラムは、2014 年 8 月 4 日から 8 月 19 日までの期間、フランス側メンバーが来日して実施された。期間中のおおよそのスケジュールは、以下の通りである。

日付	内容
8 月 4 日	フランス側メンバー到着 オリエンテーション ウェルカム・パーティー
8 月 5 日	江戸染小紋のレクチャーと体験 浅草・浜離宮見学 ダイヤモンド・ビッグ社訪問準備
8 月 6 日	ディスカッション 松浦理事長の講演 外務省表敬訪問
8 月 7 日	ディスカッション 厚生労働省ディスカッション JR 東日本訪問
8 月 8 日	ディスカッション ダイヤモンド・ビッグ社訪問 江戸東京博物館見学 OBOG 会
8 月 9 日	ホストファミリーとの一日
8 月 10 日	ホストファミリーとの一日
8 月 11 日	ディスカッション フランスデー
8 月 12 日 （京都）	堀場製作所訪問
8 月 13 日 （京都）	金閣寺見学 全日本空輸 (ANA) 訪問準備
8 月 14 日 （京都）	iPS 細胞研究所 自由時間
8 月 15 日	全日本空輸 (ANA) 訪問
8 月 16 日	ディスカッション シンポジウム準備
8 月 17 日	シンポジウム準備 シンポジウム フェアウェル・パーティー
8 月 18 日	日仏合同会議 自由時間
8 月 19 日	フランス側メンバー出発

◆ 2014 年 来日プログラム報告◆

来日プログラムは、テーマである「文化から展望するこれからの社会・日仏関係」のもと 8 月 4 日から 19 日に東京と京都で実施された。今年度の日仏メンバー計 38 名は、ディスカッション、シンポジウム、省庁訪問、研究所訪問、企業訪問、文化訪問を通じて互いの文化への理解を深めた。

来日プログラムは、日本側メンバーが主体となって準備を進めてきた。メンバーは、省庁・企業訪問担当、文化訪問担当、京都訪問担当、ホストファミリー担当のいずれかに割り当てられ、それぞれの訪問先の選定・調整、および訪問前の事前勉強会を行った。2013 年 8 月からはじまった準備は決して平坦なものではなく、思うように進まなかったことも多くあった。しかし、その都度メンバー間で話し合い、何度も「どのようなプログラムにしたいのか」「フランス側メンバーに何を伝えたいのか」「そもそも日本文化とは何だろうか」などの議論をした経験は必ず将来にも活きてくるものだと確信している。

二年間の任期中、フランス側メンバーとは定期的にメールなどを通じて連絡をとりながら日仏学生フォーラム (FFJE) の運営にあたっているが、やはり直接会い、会話を重ねることができる交流プログラムは特別な時間である。思い返すとフランス側メンバーと過ごした時間は、多くの発見で満ちていた。日々のディスカッションや訪問先でのプレゼンテーションやワークショップから、移動中の何気ない会話を通して、フランスが自分にとってより近いものになるとともに、普段暮らしている自国の文化について考えることができた。

プログラムが終わった今、この二週間ほど相手の国・文化・価値観を理解しようと努力し、自国の文化を伝えたい、日本を好きになってまた訪れたいと思ってほしいと願ったことはなかったと感じる。また、一つの国の中で完結することのない社会となった現代では、実際にフランス側メンバーと会い、時間や体験、疑問や発見を共有するこのプログラムの意義は大きくなっているように思う。フランスはもちろんのこと、日本の文化にも真剣に向き合う機会となったこの来日プログラムは、メンバーにとって卒業し、社会に出てからも立ち返る原点となっただろう。参加者にとって、日仏の架け橋、国際社会の一員としての出発点ともいえるこのプログラムが今後も続き、同志が増えていくことを楽しみにしている。

このプログラムの開催にあたり日頃から多くのご助言を頂いた公益財団法人 日仏会館、日本国外務省、在日フランス大使館、国際交流基金、三菱 UFJ 国際財団、来日プログラム期間中に訪問させていただいた省庁・企業・研究所の方々、そしてフランス側メンバーを快く受け入れてくださったホストファミリーのみなさまに御礼申し上げます。

8月6日

松浦理事長の講演　外務省表敬訪問

松浦理事長の講演

午前中、日仏会館で班ごとにディスカッションをしたあと、松浦理事長の講演が行われた。外務省で 40 年間外交官として活躍され、その後 UNESCO の事務局長を 10 年間務められた松浦理事長。懇談会では、フランス語でお話しして下さり、私たちの質問にも丁寧に答えて下さった。日仏の交流のあり方について、私たち一人一人が他者に興味をもち、お互いの理解を深めることを意識しながら直接話し合うことの大切さを語られた。また、自分の国を祖先たちが彼らの力だけで作り上げた固有のものだと思うべきでない、というお話も印象に残っている。日本もフランスも、他国からの影響を受けて、一つの国を作り上げてきた。自分の国の良さを見つけ、それらを大切にしながらも、他国と交流し、よい影響を与え合うことを恐れてはいけない、ということを歴史の観点からお話しいただき、大変興味深かった。お忙しい中私たちとの直接の懇談の場を設けて下さった松浦理事長に感謝するとともに、今回の貴重なアドバイスを今後の交流に活かしていきたいと思う。

外務省表敬訪問

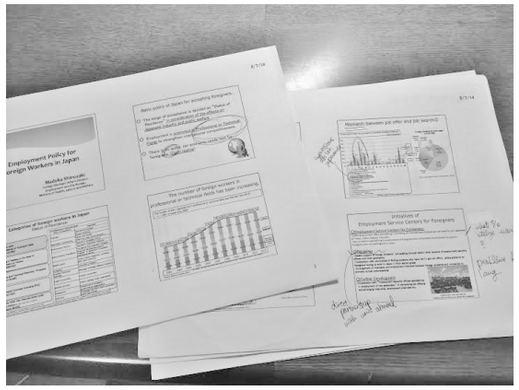
松浦理事長の講演後、私たちは霞ヶ関に移り、外務省表敬訪問を行なった。日仏を行き来し、両国で活躍なさっている欧州局西欧課の西野様から、日仏の交流についてフランス語でお話をいただいた。ヨーロッパ諸国と関わるとき、「フランス」というように一国を見るだけではなく、「EU」というより広域の共同体を意識して交流することが、重要になってきているという。また、日本と欧米諸国は文化的には異なる点も多いが、政策や経済面ではたくさんの共通点があり、お互いに近い存在として関わることも可能だということもおっしゃっていた。外務省に実際に訪れ、最前線で国をリードしてきた方のお話を直接聞けたことは、私たちにとって本当に貴重な体験だったと思う。

8月7日

日本国厚生労働省 ディスカッション

本企画では、厚生労働省・外国人雇用対策課の方をお招きし、主に日本の外国人材の受け入れについて学習し、ディスカッションを行った。日仏学生フォーラム (FFJE) では例年、移民・外国人労働者の受け入れ政策に強い関心と問題意識を持つメンバーが多い。過去にはディスカッションのサブテーマとして扱われたこともあり、私自身も昨年度のディスカッションでこのような問題に頭を悩ませた。外国人労働者の受け入れは日仏両国にとって重要な課題であり、また我々の議論が机上の空論とならぬよう、日本において外国人労働者受け入れ政策の最前線に立つ厚生労働省の職員の方から実務経験に基づくお話を聞き、直接意見交換を行うというのが本企画の主旨であった。

現在日本政府は入管法に規定される在留資格の範囲内で海外から労働者を受け入れており、まずは高度外国人材受け入れ政策の概要や、企業が求める人材と留学生の実態とのミスマッチ、現在どういった打開策が実施されているか等について説明を受けた。その後、日本側・フランス側メンバーが、説明で言及された高度外国人材受け入れにおいて日本が抱える諸問題の解決策を考えた。フランス側メンバーの多くが実際に日本の企業や研究所でインターンシップを経験、あるいは検討しており、おそらく多くの日本人が初めて知るような現状を指摘してくれた。例えば、人材の需要と供給のミスマッチが生じている科学の分野に関して、物理を専攻するフランス側メンバーは、海外の若手研究者が日本の研究所を避けてしまう理由に独特なヒエラルキー体制があると発言した。日本の研究所では、新米の研究者はいくら優秀でも初めは雑務をさせられるという印象が海外では強く、インターンシップに参加しても何も得られずに終了してしまうのではないかという懸念が存在し、日本はこのようなマイナスイメージを払拭しなければならないとのことだった。本企画を通して、参加メンバーは日本が直面する具体的な課題を正確に把握し、その解決への手がかりを見つけられたのではないかと思う。



8月7日

東日本旅客鉄道 (JR 東日本) 訪問

来日プログラム四日目の朝、日本側メンバー９名、フランス側メンバー８名の計 17 名で、東日本旅客鉄道 (JR 東日本) を訪問させていただいた。JR 東日本の鉄道は、日本人であれ外国人旅行客であれ、関東に滞在する人々すべての生活に密着しているといっても過言ではない。暮らしに溶け込む日本の鉄道事情を改めて考えるべく、JR 東日本の様々な事業のなかでも特に鉄道事業・生活サービス事業の二つに着目し、今回の訪問をお願いした。

当日、まずは担当者の方が設定してくださった訪問のテーマ「首都圏のターミナル駅について東京とパリを比較する」に基づいて、メンバーによるプレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションは、訪問に参加するメンバーを対象にした事前アンケートの集計結果をもとに作成されたものである。上述した二都市の最も顕著な違いとしてメンバー間で指摘されたのは、駅構内の商業施設「エキナカ」の有無であった。パリではベンチに座って読書をしたり大道芸人の演奏する音楽を聴いたりなどして駅での待ち時間をつぶす利用客が多い一方で、「エキナカ」のある東京では、買い物や食事をするなど、鉄道の利用とは別の目的をもった時間の過ごし方ができる点が特徴的である。また、秩序立っていて清潔である、人の流れが活発であるといった東京の駅に対する印象も、「エキナカ」の存在に起因する側面があるのではないかというフランス側メンバーからの指摘があった。プレゼンテーションの後は、JR 東日本の社員の方々にメンバーからの質疑に答えていただいた。特にフランス側メンバーにとっては、東京とパリの鉄道運賃の違いなど、来日して初めて抱いた疑問が多くあったようで、いつまでも議論の尽きない白熱した時間となった。

今回着目したのは「駅」「鉄道」というごく限られた要素である。それにも拘らず、東京とパリのターミナル駅の比較に関する議論は時として国そのもののイメージを支える文化の違いにまで及んだ。これまで鉄道利用時の単なる通過点に過ぎなかった駅ひとつをとっても、その背景には異なる文化をもつ各国の違いがはっきりと存在するということを強く認識するきっかけとなった訪問であった。

8月8日

ダイヤモンド・ビッグ社 訪問

８月８日午後２時、日仏学生フォーラム (FFJE) は、計 18 名でダイヤモンド・ビッグ社を訪問させていただいた。訪問の背景には、編集者の方にお話を伺うことで、文化を他者に伝える媒体としてのガイドブックについて知識を深めるとともに、外国人観光客に対していかに魅力的に日本を発信できるかを考えたい、という思いがあった。なお、海外旅行者向けの『地球の歩き方』シリーズで知られる同社だが、今回の訪問では、訪日外国人対象のフリーマガジン『GOOD LUCK TRIP』に焦点をあてた。

当日は、明るく和やかな雰囲気のなか、ご講演・ワークショップ・福島県の観光に関する意見交換の三部構成で進行し、内容の濃いあっという間の二時間となった。なかでも、訪日外国人の個人旅行者向けに観光モデルプランを作成するワークショップは、事前準備も含めてかなり深みのあるアクティビティだったと思う。具体的には、メンバーが班に分かれて都内五か所の観光地 (秋葉原・浅草・渋谷・新宿・日本橋) を見学した後、実際の誌面を想定したワークシートを作成し、当日その内容を発表する、というものであった。どれも私たちにとっては馴染みのエリアだからこそ、フランス側メンバーと歩くと、彼らの驚きを感じるポイントや何気ない意見が面白く新鮮だった。また、編集者視点に立つことで、誌面という限られたスペースに記事を掲載する際のトピック選択の難しさを身をもって感じることができた。

誌面という小さな枠から覗く文化は、読者にとって鮮やかかつ魅力的に映る。そしてその魅力は、わかりやすく地域のイメージを伝える、読者の関心に応じて地域のよさが最大限に伝わる観光スポットを選ぶ、地図や交通手段などの情報を盛り込むことで快適なまち歩きを隅々までサポートする、といった編集者の細やかな心配りに支えられたものである。今回教わったこうしたガイドブック編集のエッセンスは、ワークショップをはじめとする体験を通して、より一層自分たち自身の胸に迫るものとして感じられた。

日本を「伝えたい」と思う日本側メンバーと「知りたい」と思うフランス側メンバーとが共に過ごす来日プログラムは、誌面作りに例えれば、編集者と読者とが直接対峙する貴重な機会だと言えよう。誌面、すなわちプログラムの中身を一度作ったことだけに満足するのではなく、二週間の期間中もフランス側メンバーの意見を聞きながら改善すべき点を探っていきたい。日本側メンバーとして、そのようなことを考えるきっかけを与えてくれた訪問であった。

8 月 12 日

堀場製作所 訪問

堀場製作所は京都に本社をおく分析機器の総合メーカーで、いまや世界 27 カ国に拠点をもつグローバル企業、そしてフランス内には三つの拠点を構える。2011 年には École Polytechnique に併設する研究所を開設、またフランス人社員が日本人社員に次いで多い等、フランス産学官と密接な関係を築いてきた。日仏学生フォーラム (FFJE) のフランス側メンバーには École Polytechnique 生を含む理系学生が多い。また堀場製作所では「京都の職人文化」の精神をその経営理念に受け継いでいると聞いていた。日仏の連携や、テーマ「文化から展望するこれからの社会・日仏関係」について考えを深めるための訪問として最適だと判断した。

8 月 12 日、到着すると取締役の足立様や、企画時から大変お世話になったグローバル人事部大柿様が出迎えてくださった。社長の堀場厚様のご講演、社内見学、パネル見学という充実したプログラムであった。社長堀場厚様は、フランス発のブランドをグローバルに展開してきた実績や、日仏両国の技術・人材を融合させる経営などが評価され、フランス政府より 2010 年にレジオン・ドヌール勲章を受章された。社員からのフィードバックを重視し世界各地を飛び回るご多忙な方であるにもかかわらず、自らご講演くださった。「社内誕生会」や「ファンハウス」など人材育成を重視した堀場製作所独自の取り組みや「おもしろおかしく」といったモットーに対して、メンバーは興味津々だった。「オリジナリティのある製品をつくるにはエンジョイする必要がある !」が HORIBA で大事にされている精神であり、それが見事に成果を挙げているようだ。社内見学では、自動車、環境、医用、半導体分野の優れた分析・計測機器をじっくり見せていただいた。最先端技術を駆使した精密な分析機器からは京都の職人精神が感じられた。

多くの企業が東京に本社を移すなか伝統的な街・京都に本社を構え、京都から世界へ優れた技術を発信し続ける堀場製作所。ビジネスで大切なのは「自国の文化に対して誇りと自信をもつこと。」であり、それがグローバル企業として世界へ進出した際に他者を理解する前提条件である、という社長のお話は今後の FFJE の活動を考えていく上でも重要だと感じた。

8 月 14 日

京都大学 iPS 細胞研究所 訪問

二泊三日で行われた京都訪問の最終日、私たちは京都大学 iPS 細胞研究所を訪問した。京都というと、歴史と伝統文化の街というイメージだが、京都には大学が多く、大学の街であるとも言われており、京都市は実際に「大学のまち京都・学生のまち京都」という政策を行っている。また、日本人で初の受賞者・湯川秀樹氏や、日本人第二号の受賞者・朝永振一郎氏など、京都大学からは多くのノーベル賞受賞者を輩出している。フィールズ賞を受賞した三人の日本人のうち二人は京都大学出身である。このような京都のアカデミックな側面をフランス側メンバーにも知ってもらいたいと思い、この訪問を企画した。また、同研究所所長の山中伸弥氏は 2012 年にノーベル生理学・医学賞を受賞している。そのような世界に誇ることのできる日本の最先端研究をフランス側メンバーに見せたい、との思いもあった。

当日は、まず研究所の概要や iPS 細胞について、研究所の方から丁寧な説明を受けた。質疑応答ののち、二つのグループに分かれて研究所内を見学した。この際も研究所の方から細部に渡るご説明を頂いた。実際に研究が行われているスペースはオープンラボになっていた。オープンラボとは、通常個室になっている研究室の壁を取り払った研究室の形で、研究者同士の交流を促進するものだという。日本では iPS 細胞研究所がいち早くこの形式を取り入れた。また、研究フロアの真ん中は吹き抜けとなっており、上下階をつなぐ螺旋階段が設置されている。階段を使う際にドアの開け閉めをする必要がないので、研究者が器具を両手に持っている際にも移動しやすい。このように、興味深い工夫が随所に施されていた。また、研究者の方々の個室が並んでいるフロアも見学した。同じフロアにあった休憩のためのスペースには大きな窓がついており、五山送り火の日には大文字焼きが見えるという。私がもっていた研究所のイメージと違い、明るく広々としており、研究者が多くの時間を過ごすということを配慮して、快適に過ごすことができるように作られていると感じた。

フランス側メンバーには理系のメンバーも多く、iPS 細胞や研究所について熱心に質問しているメンバーもいた。日本が誇る最先端の研究所を見学することで、歴史と伝統文化の街という今までメンバーが持っていた京都のイメージに新しい要素を与え、さらに京都について理解が深まったと考える。

8 月 15 日

全日本空輸 (ANA) 訪問

全日本空輸 (ANA) への訪問では、同社の運営するウェブサイト「IS JAPAN COOL ?」を題材に、「自国文化の国際発信」のあり方についてのお話を伺った。

「IS JAPAN COOL ?」は、2012 年 2 月に公開されたウェブサイトで、東日本大震災によって大きな打撃を受けた日本とその観光業の活性化、及び日本への海外からの訪問客の増加を目的として設立された。ANA への訪問のきっかけは、このウェブサイトの持つ様々な特徴である。ウェブサイト内では、日本独特の文化や街並み、行事などが紹介されている。テキストのみならず写真や動画も駆使されており、眺めているとあっという間に時間が過ぎてしまう。また、紹介されているコンテンツの中には「多機能トイレ」など外国人目線だからこそ興味を惹かれるであろうものもあり、我々にとっての「当たり前」を面白おかしく取り上げたコンテンツは日本人が見ても十分に楽しめるものになっている。何よりも興味深いのは、航空会社の主催するウェブサイトでありながら、商業的な印象をほとんど感じさせることなく、あくまでも日本の魅力を伝えることを第一とした内容になっている点である。さらに、Facebook を介した記事のシェアや他のユーザーによるコメントの表示など、SNS を通じた情報の入手や紹介が容易にできるように工夫されている。こうした特徴を踏まえ、「IS JAPAN COOL ?」は「自国文化の国際発信」の現代における新しい形のひとつともいえるのではないかと考えた。そしてその制作に実際に携わっている方々のお話を伺うことは我々にとって有益な経験となると考え、ANA を訪問させていただいた。

訪問の際は、ウェブサイトの構成の説明に始まり、「IS JAPAN COOL ?」プロジェクトのジャパン・エキスポ 2013 や五輪招致への貢献の紹介、そして文化の海外発信における戦略についてお話いただいた。

中でも印象に残ったのは、紹介するコンテンツを選択するプロセスにおいて導入される考え方やモデルについての説明だった。数多く存在する日本独自の文化や風習、風景を取捨選択し、海外の人々に発信していくことは簡単なことではない。これらの「日本的なもの」を、時代や空間的な所在地を基礎とする一定の枠組みの下に捉え直して分類し、紹介される日本文化に偏りがないようにウェブサイトのコンテンツを決定していく。実際に「IS JAPAN COOL ?」のコンテンツが決定されるプロセスで使用される日本文化の捉え方は、日本を訪れる海外の人々に対して様々な魅力の詰まった「日本」を過不足なく伝えるというウェブサイトの目的の達成のみならず、我々日本人が日本という国を捉える上でも、非常に有効なものであるように感じた。

国の文化は決して一面的に捉えられるものではない。当然日本にも様々な姿がある。一方で、一国のイメージは固定的に捉えられてしまう事も多々ある。これから先、日仏両国をはじめ海外の人々に対して様々な場面で自国を背負って向き合う機会も十分にあり得るだろう。そのとき、自分の暮らす国の姿を正しく、そして最も好ましい形で伝えられるよう、今回の訪問をきっかけに改めて日本の文化を見つめ直してみたいと思う。

8 月 12~14 日

京都訪問

2014 年のテーマに掲げられた「文化」に対して多角的なアプローチをとるために、この京都訪問は企画された。東京を中心として活動が行われる来日プログラムにおいては、世界有数のメガロポリスとしての東京の姿を体感することは難しいことではない。そうした現代の首都の姿に対して、かつて都として繁栄を極めた京都に残る文化の様態は、より一層伝統を重んじるものである。それでいながらにして、一方では日本の最先端技術を牽引する地でもある。こうした伝統と先進技術の折衷により、日本において、そして世界においても、京都は他の都市と一線を画す都市としての地位を確立することとなっている。東京と京都という日本を代表する二大都市を比較して展望することは、フランス側メンバーのみならず、日本側メンバーも含めて、日本の文化体系をより深く理解するための契機となるのである。

伝統文化を残す都市としての京都の姿を、寝食を過ごすという意味での「生活」の段階から体感してもらおうという意図を基に、宿泊先として町家をリノベーションしたゲストハウスを選定した。お盆の時期の訪問となった京都では度々猛暑に襲われたが、そうした京都の気候を考慮して造られた町家の中を吹き抜けていった風は、メンバー達の脳裏にかつて京都に暮らした人々の姿を想起させたのではないだろうか。最先端技術を有する企業訪問においては、現場の皆様の技術解説などのサポートのおかげもあり、フランス側メンバーも訪問を存分に楽しめた様子であった。それに対して、世界文化遺産にも登録されるほどの歴史的な寺社群の代表的な存在として選定した金閣寺への訪問に際しては、来日プログラムの実施前に日本側メンバーの間で行っていた金閣寺に関する勉強会が功を奏した。金閣寺にまつわる歴史を中心とした知識を補強することにより、フランス側メンバーに対して単なる観光の域に留めない訪問を提供することが出来た。またこうした活動を行うことは、日本側メンバーの自国文化を発信するという意識を啓発するきっかけともなったことだろう。

京都で過ごした三日間は、日本側メンバーとフランス側メンバーという異文化を背景に持つ者同士がより深く交わる機会ともなった。それは伝統と先進技術という性質を異にする文化が邂逅するこの土地の風土のおかげだったのではないだろうか。京都訪問を経た後のディスカッションの中には相互的に他者を意識した視座がより強く宿り、深みを増した議論に発展していったように私は感じた。

8 月 5 日、8 日

文化訪問 (東京)

2014 年のテーマである「文化から展望するこれからの社会・日仏関係」に基づいて、三つの文化訪問を行った。今年度は京都を訪問するため、江戸・東京の文化の理解を深めるとともに、文化の保存・変容・共存に関して、日仏メンバーのディスカッションを促すことを基準に選定した。伝統的工芸品に指定されている江戸染小紋の体験と文化の継承者である職人の講義、下町と大名文化、それぞれの文化の保存と現代文化との共存の仕方が対比できる浅草と浜離宮恩賜庭園、そして東京の歩んできた歴史を学ぶことができる江戸東京博物館。これらの訪問・体験・見学は日仏双方のメンバーにとって日本への理解を深める機会となった。また、双方の発見を共有することで相手国の文化を理解するとともに、改めて自国を見つめなおす機会となった。

江戸染小紋　東京染ものがたり博物館　(8 月 5 日)

大正 3 年の創業以来、江戸染小紋を製作し続けている工房の見学に加えて、染小紋体験、そして五代目のご主人の富田篤さんによる講義を拝聴した。

講義では、反物や染めの種類から小紋の特徴まで、詳しく説明していただいた。フランスでも Kimono という言葉は知られているが、今の日本で着物姿の人を見かけることは珍しい。日本の伝統文化の着物にまつわるルールや歴史を、伝統工芸の職人から直接学ぶ貴重な機会だと考えて、今回訪問先に選定した。加えて、裁断を重視する洋裁と、同じ形の反物を使用し染めのデザインに凝る和裁の違いにも注目した。

日本側メンバーは、事前に染物の行程や歴史について定例会議内で勉強しており、フランス側メンバーに対して説明する姿も見られた。フランス側メンバーも積極的に質問しており、一時間の講義は短く感じられるほど充実していた。本訪問を通じて、日本の伝統文化である染小紋について学ぶだけでなく、メンバー間の話題づくりの場も生まれた。

型染め体験で作った染物は全員で同じ柄に染め上げたが、一枚として同じものはない。この先一人一人が築いていく日仏の架け橋の象徴になればと願っている。

浅草・浜離宮恩賜庭園　(8 月 5 日)

文化訪問では江戸・東京に着目し、江戸時代から下町文化を発展させ、人々の暮らしに身近な存在であった「江戸・まちの文化」の象徴である浅草・浅草寺と徳川将軍や大名たちに愛された場所として「江戸・城の文化」を象徴する浜離宮恩賜庭園を訪れた。それぞれワークシートやフランス語のオーディオガイドを活用しながら歴史的・文化的知識への理解を深めた。浅草寺は、推古天皇の時代の 628 年に建立された東京最古の寺院として知られている。風神雷神がそびえ立つ雷門をくぐり、仲見世を通って本堂や国の重要文化財の二天門などの見学を行った。人々のにぎわいを見せる浅草はまさに今なお愛される下町の雰囲気を体感することができた。一方、浜離宮恩賜庭園は国の特別名勝及び特別史跡に指定されており、東京で唯一の潮入の池が存在する庭園である。都会の中心に位置しながらも、木々や花々の香りを感じながら時折吹く潮風が心地よい美しい場所であり浅草とは対照的な雰囲気を味わえた。文化の保存と変容そして現代への融合を体感することのできた訪問であった。

江戸東京博物館 (8 月 8 日)

8 月 8 日の午後、東京ならではの歴史や文化を体系的に学ぶために江戸東京博物館を訪問した。この博物館の特徴は非常にわかりやすい解説と、ユニークで臨場感のある展示である。ただ鑑賞するのではもったいないので、クイズラリーの冊子を用意した。熱心なフランス側メンバーは、一時間ほど経過している段階でまだ最初の方のコーナーにおり、じっくり解説を読んでいた。

この博物館で学べることは、東京や日本の持つ、文化を受容し新しく作り変える柔軟性であると思う。江戸時代は民衆が歌舞伎などの文化を盛り上げ、独自に経済活動をしてきたが、明治時代では、西洋文化を巧みに受け入れ、あっという間に近代化を遂げる。印象的だったフランス側メンバーの 1 人の感想には「とても驚いたのは、日本の近代化がヨーロッパの 19 世紀や 20 世紀の歴史ととても似ていることだ」とあった。日本だけだと思っていた歴史の流れはヨーロッパにもあったのかもしれない。外側から見ると違って見えるこの視点を、また一つ学ぶことができた。

8月4日（月）

いよいよ来日プログラムが始まる――期待と不安で朝からそわそわしていた。だが、日仏会館に到着したフランス側メンバーが笑顔で挨拶してくる波にのまれて不安は吹き飛んだ。「早く仲良くなりたい！何から話そう！」それまでWeb上でやり取りをしていた相手が実際に自分の目の前にいることに感動した。

15時には大半のメンバーが到着し、日仏会館ギャラリーでアイスブレイクとしてゲームをした。日本のゲームである「王様ゲーム」のように割り箸のくじを引き、王様の命令に従う。うまく進行するか不安であったが、フランス側メンバーがオリジナルのルールを提案してくれたこともあり、このゲームで全員がユニークな自己紹介をすることができた。その後のウェルカム・パーティーではホストファミリーのご家族とフランス側メンバーがすぐに打ち解けて仲良くしている姿を見て安心しつつ、私も負けずにたくさんコミュニケーションをとりたい、と意気込む初日であった。

Pour la première fois en cette journée du 4 août, tous les membres du programme se sont retrouvés à la Maison Franco-Japonaise. La journée a été rythmée par les arrivées successives des différents membres, et une fois que nous étions au complet, nous avons commencé par un « ice-breaking » organisé par les Japonais : nous devions nous présenter (en japonais pour les Français, et inversement) et faire des petits jeux organisés par couple, un Japonais et un Français. Très timides, nous avions peur que notre tour arrive, mais le moment venu, nous nous sommes amusés et étions contents de l'avoir fait.

Ensuite, les familles d'accueil sont arrivées à la Maison Franco-Japonaise, où un buffet avait été installé. Ce fut l'occasion de rencontrer nos familles d'accueil, bien sûr, mais aussi de faire connaissance, entre membres Français et Japonais.

8月5日（火）

午前中は東京染ものがたり博物館で、日本の伝統的工芸品である江戸染小紋の製作体験を行った。始めに富田篤さんから染物の種類と違いを教えていただき、型染めを体験。緻密な模様の彫られた型紙の上からヘラで慎重に糊を置き、型紙を外すと、生地には美しい小紋様が浮かび上がり、日本伝統の技の素晴らしさを体感した。

お昼にお好み焼きやもんじゃを食べた後は、浅草で仲見世と都内最古の寺院である浅草寺を見学し、江戸の町の文化を学んだ。

その後、浜離宮恩賜庭園へ向かい、フランス語対応の音声ガイドを片手に、美しい緑と高層ビル群が調和する、江戸時代の美しい大名庭園を楽しんだ。池の中に浮かぶ島や橋など、自然の美を上手に遊び楽しむ庭の構造に、日本人独特の工夫を感じた。丘の上で感激したように「素晴らしい」と言ってくれたフランス側メンバーの一言が忘れられない。メンバーの一部はその後ダイヤモンド・ビッグ社の事前ワークへと向かった。

Le 5 août, nous a été donnée l'opportunité de visiter un des ateliers de fabrication de kimonos les plus célèbres du Japon. Tous, aussi bien Français que Japonais, avons ainsi pu entre-apercevoir la complexité de cet art qui n'a pas évolué depuis le XIIème siècle.

Au cours de cette visite, le maître nous a expliqué les différentes techniques de fabrication de kimonos traditionnels. Il nous a également décrit les diverses occasions au cours desquelles ils sont portés. Ces kimonos sont réservés aux cérémonies spirituelles ou aux évènements marquants (mariages), leur prix très élevé (entre 30,000 et 1,000,000¥) empêchant un port plus régulier.

Nous fûmes ensuite divisés en deux groupes. Le premier visitait l'ensemble de l'atelier de fabrication, en apprenant plus sur les différentes étapes de la fabrication des kimonos, du tissage de bobines de fils pour en faire le tissu à la confection des teintes, pendant que l'autre avait le droit à une séance de travaux pratiques, utilisant les conseils appris un peu plus tôt au travers de l'impression à l'encre sur quatre morceaux de tissus de motifs.

Cette activité fut une occasion rêvée de partager un premier bon moment entre tous les étudiants.

8月6日（水）

午前中日仏会館でディスカッションをしたあと、松浦理事長の講演が行われた。現在日仏会館の理事長として、私たち日仏学生フォーラム (FFJE) の活動を支えて下さっている方だ。懇談会では、日仏の交流のあり方について、日本人、そしてフランス人個々の交流の大切さなどを語られた。

その後霞ヶ関に移り、外務省表敬訪問を行なった。日仏両国で活躍なさっている欧州局西欧課の西野様から、日本と欧米諸国がお互いに近い存在として関わることが可能だというお話をいただき、大変勉強になった。

夜は、廣田副理事長による夕食会であった。中目黒のレンタルキッチンで、廣田副理事長自ら、学生全員分の夕食を作って下さったのである。料理の品数も豊富だったが、どれも本当においしかった。日仏メンバー全員でいろいろな話をしながら料理を囲み、交流がより深まった夜だったと思う。

Deuxième journée du programme organisé par nos amis japonais. Encore une belle journée, pleine de découvertes. Nous avons commencé par nous retrouver à la MFJ, pour notre première séance de discussions. Ce que j'avais hâte de commencer ! L'art étant une des choses qui m'intéresse et me tient le plus à cœur, je ne demandais qu'à échanger à ce propos avec Saki, Momoko, Hiroki et Valentin. Nous avons discuté de choses très intéressantes, notamment des livres pour enfants – ce qui tombe très bien, puisque j'aime faire de l'illustration.

Mais ce n'est pas tout, après le déjeuner – délicieux, comme toujours – nous avions rendez-vous avec le directeur de la MFJ, pour une discussion très enrichissante sur les relations franco-japonaises ; après cela nous sommes allés au Ministère des Affaires Etrangères, où Mr. Nishino nous a appris beaucoup de choses sur le rôle du Japon dans les relations internationales aujourd'hui. Pour terminer la journée en beauté, nous avons dîné tous ensemble, Professeur Hirota, aidé par quelques étudiants japonais, nous ayant préparé de la nourriture traditionnelle absolument succulente. Un immense merci !

C'est l'esprit plein de nouvelles idées et la bouche de nouvelles saveurs que je suis rentré chez ma famille d'accueil !

8月7日（木）

プログラム四日目の朝は、各メンバーが事前に選択した企画に向かった。日仏会館では厚生労働省外国人雇用対策課の方をお招きし、約二時間にわたって、日本の高度外国人材受け入れ政策について学び、意見交換を行った。フランス側メンバーの多くが、自ら高度外国人材の候補として日本の企業でインターンシップを経験していたこともあり、日本の現状に対して鋭い指摘がなされた。門戸を開き始めているとはいえ、未だ多くの課題を抱える日本社会の姿が浮き彫りになった。

午後は全メンバーが会館に戻り、ディスカッションを進めた。私が属するファッション班では、東京とパリのストリートファッションを比較するために、街頭調査で尋ねる質問項目を考えた。また、両国の就職活動における服装の違いについても議論を始めた。ファッションという身近な話題にも、ジェンダーや労働観のような、社会に深く根ざす価値観の違いが見受けられ、発見に満ちたディスカッションであった。

Pour David et moi, après avoir passé une soirée merveilleuse à déguster un festin de roi, le 7 août s'est aussi présenté sous les meilleurs auspices. En effet, pour commencer la journée, nous avons tous les deux eu la chance de visiter avec notre mère d'accueil le complexe religieux de Nakayama comprenant une douzaine de temples et notamment le célèbre Hokekyō-ji, un temple Nichiren-shū du XVIIe siècle classé 重要文化財 (jūyō bunkazai) au Japon, c'est-à-dire « bien culturel important ». Sous la superbe lumière d'une matinée d'été, nous avons notamment pu prendre des photos magnifiques avant même de retrouver nos camarades du FFJE. Ensuite, le groupe s'est séparé en deux visites : certains sont allés au 日本国厚生労働省 (Ministère de la Santé, du Travail, et des Affaires sociales du Japon) et pour ma part, j'ai eu la chance d'aller visiter avec mes camarades la compagnie JR-East, à Shinjuku, où nous avons été très bien reçus et avons réfléchi sur les différences entre les gares et les trains à Paris et à Tokyo. Cette réflexion a été très intéressante et étayée par un questionnaire qui nous avait été soumis à l'avance. Or ce questionnaire a révélé que nous étions tous d'accord sur le fait que la France avait beaucoup à apprendre du modèle japonais en termes de transport ferroviaire ! La journée s'est ensuite poursuivie par nos ateliers discussions à la Maison franco-japonaise puis s'est achevée tranquillement dans nos familles d'accueil. La nôtre, ce soir-là nous avait d'ailleurs préparé un dîner typiquement japonais des plus savoureux ! En somme, cette journée reste dans mon souvenir comme une des plus intéressantes.

8月8日（金）

朝9時半、班ごとのディスカッションから始まる五日目。日仏会館で交わす朝の挨拶も板についてきて居心地が良い。一週目のディスカッションを小括しつつ、週末に各自がどんな準備を進めるかを話し合った。

午後は二手に分かれて江戸東京博物館またはダイヤモンド・ビッグ社を訪問。旅行ガイドブックで知られるダイヤモンド・ビッグ社では、編集部の方々と意見交換をしながら、日本の魅力をいかに効果的に対外発信するかを考えた。特に印象的だったのは、事前に準備した観光プランを発表するワークショップである。フランス側メンバーと日本側メンバーの着眼点の違いが垣間見え、驚き、共感、感心といった様々な反応が部屋のあちこちを飛び交った。

その後新宿で合流し、盛り沢山な一日をOBOG会で締めくくる。フランス側メンバーの陽気さに心弾む中、近況を報告しあい、先輩方の頼もしいご活躍を伺った。素敵な出会いに改めて感謝する、楽しい夜であった。

J'ai été choisi pour écrire mes impressions sur le musée d'Edo Tokyo. Il est tout d'abord nécessaire de faire quelques commentaires sur la forme de cet étrange bâtiment. C'est en effet un sorte de gros trapèze de béton entièrement carrelé posé sur 4 pieds. Le tout donnant une certaine nuance de vaisseau spatial. Bref, le Français moyen s'attendrait plutôt à trouver le musée dans l'arène imposante des sumos juste à côté que dans ce bâtiment aux accents modernes. Une fois que l'instant de surprise est passé, on se met à grimper l'escalator vertigineux pour accéder à ce vaisseau spatial. Le début du musée est dédié à l'époque Edo et les maquettes des résidences d'époque sont très sympa. En continuant la visite, on découvre des représentations grandeur nature des maisons de la populace sous le shogunat et il est même possible de s'amuser à soulever une reproduction d'une lance-bannière d'époque. Lorsque l'on tombe sur la belle barque nippone d'époque on comprends que l'accent est mis sur l'interaction avec le public plus que sur l'enseignement : les panneaux explicatifs ne sont d'ailleurs traduit du japonais qu'à 50 pour cent. Le théâtre japonais d'Edo, en face de la belle collection de rickshaw, impressionne par sa devanture rouge et doré. C'est à l'intérieur que se trouve ma partie préféré du musée : l'histoire de l'ouverture du Japon à la pensée occidentale. On peut en effet marcher sur la vitre qui protège la maquette du manoir des officiels étrangers ou encore admirer le modèle réduit animé de la première ville occidentalisé du japon. Pour finir, faire un saut dans la partie consacrée à un pan de l'histoire plus sombre du Japon vaut le coup. On peut en effet avoir un aperçu des conditions de vie des japonais durant la Deuxième guerre mondiale à la fin du musée : maison typique des années 40, bombardement intensif, incendies... On regrette à tel point de devoir quitter ce musée que l'on se sent forcé de ponctuer la sortie par un : « atsui desu ne !».

8月9日（土）～10日（日）

Le week end du 8 et 9 août a été l'occasion pour moi de découvrir Tokyo d'une façon un peu plus touristique. Ryûji et Akiko, les parents dans ma famille d'accueil, m'ont accompagnée et ont été soucieux de me faire voir un maximum de choses sans que je n'aie à me préoccuper de rien. Le samedi, nous sommes allés à Asakusa où j'ai pu acheter des o-miyage et manger des soba. Ryûji a aussi tenu à me faire goûter un ningyô-yaki, gâteau que je ne connaissais pas et que j'ai adoré. L'après-midi, nous nous sommes promenés à Harajuku, dans la rue Takeshita, où je me suis amusée à faire un purikura avec Akiko. Après une pause bien méritée, nous avons visité l'immense et magnifique Meiji-jingu. Le lendemain, ma famille d'accueil m'a proposé d'aller au Musée du ramen de Shin-Yokohama où j'ai pu découvrir à quoi ressemblait le Japon des années 50 et manger des ramen délicieux. Ces moments partagés avec ma famille d'accueil étaient très précieux et j'en garde un excellent souvenir. Ryûji et Akiko ont été aux petits soins pour moi et discuter avec eux de nos différences culturelles a été très enrichissant.

Le weekend du 9-10 aout avec la famille japonaise, nous avons décidé d'aller à Hakone, le parc national de Fuji- Hakone- Izu qui est centré autour du beau lac Ashi.

Avant de partir au Japon, on avait déjà pris contact avec Saki Tabata, fille japonaise qui devait m'héberger a Tokyo pendant 2,5 semaines. J'ai eu trop la chance, car Saki parlait français et anglais couramment et on pouvait faire connaissance par Facebook quelques semaines avant mon arrivée à Tokyo. Saki vivait avec sa mère et sa petite sœur à Chōfu, ville de la préfecture de Tokyo.

On se dit qu'on va passer ensemble le weekend du 9-10 et elle m'a laissé choisir ce que je voulais visiter. J'ai toujours rêvé de voir le Mont Fuji, mais comme c'était ma première fois au Japon, je n'avais aucune idée des distances au Japon et si ce trajet était accessible en 2 jours.

Après avoir expliqué mes envies, Saki m'a contactée pour dire qu'on va ensemble à Hakone, bien connue du public pour ses Onsens et ses vues du mont Fuji. Un rêve qui se réalise! Ma famille japonaise a tout réservé bien en avance: aller retour en train shinkansen, un superbe spa hôtel dans le style japonais, le diner et petit déjeuner. Par ironie du sort, pendant 2 jours qu'on a passé à Hakone, juste en face de Mt Fuji, on ne l'a pas vu. C'était le seul weekend de toutes les 3 semaines que j'ai passées au Japon, où il pleuvait et faisait du brouillard. Alors, il faut revenir !

8 月 11 日（月）

早くもプログラム二週目を迎えた。皆、随分と打ち解けたようで各グループでは笑いを交えながらもスムーズにディスカッションを行っている様子が見受けられる。そうして午前はあっという間に過ぎ、午後は (主に日本側メンバーが) 待ちに待ったフランスデーが始まった。まずはフランスで流行っているというカードゲームや小物づくり体験。そして個人的に一番楽しみにしていたデギュスタシオン。フランスから持ってきてくれた飲み物や食べ物、さらにはフランス側メンバー手製の料理も並び正に夢のようであった。さて、お腹も満たされたところでお次はフランスの紹介、歌や踊りに劇。素晴らしいパフォーマンスの数々に笑いあり感動ありの数時間で大いに盛り上がった。今日のためにフランス側メンバーがどれだけ頑張って準備してくれたのかが窺える。ありがとう、本当にありがとう。沢山の温かさと元気をもらった一日であった。

Débarqué de mon stage à peine deux jours auparavant, je découvrais la nouvelle génération du FFJE côté japonais ce lundi. Pour ne pas augmenter la difficulté d'une si intense première journée de programme, j'avais eu la bonne idée d'être le responsable journée française qui avait lieu...aujourd'hui.

Alors vous imaginez bien. Les discussions du matin durent passer à la trappe pour me permettre d'agencer le tout à la dernière minute. Mais n'allez pas croire que rien n'avait été fait. Préparée en amont, cette journée française fut un savant (ahem...) mélange d'improvisation et de prévision. La dégustation par exemple fut un beau succès grâce au travail de chacun des membres français. Il faut dire qu'avec la variation des régions d'origine que nous avions dans notre groupe, se priver de galette bretonne, de confiture de lait et de navette de Marseille eut été un crime.

Pour les activités, là encore, une prévision et une improvisation. Pour montrer comment jouer et passer le temps en France (et ainsi retomber dans notre enfance), du plastique fou et un jeu de loup-garou furent présentés.

Pour ce qui est du spectacle, ce fut plus difficile. Tout en français (désolé), présenter les régions tout en enchaînant des petits sketchs (merci Célia Choisi pour les frères Taloche) put, je pense, présenter la France sans se prendre la tête. Bref, une journée sympa dans le stress mais aussi le résultat. En espérant que vous vous êtes amusés.

8 月 12 日（火）

京都訪問の一日目。新幹線で京都駅到着後、まず全員で株式会社堀場製作所へ向かった。最寄りの西大路駅からの道のりでは、堀場製作所でのインターンシップ経験があるフランス側メンバーが先頭に立ち誘導してくれた。当日は、社長の堀場厚様のご講演、社内見学、フランス産学官と当社の密接な関係を示すパネル見学など全三時間の充実したプログラムを準備してくださった。また快適なお部屋と美味しい昼食までご用意いただき、京都の暑さに早くもばててていたメンバーは感激していた。

12 日の夜は、京都駅周辺の和食屋さんにて皆でわいわいと夕食を楽しんだ。浴衣を身につけて登場したフランス側メンバーもいた。さて、今回は町家を改装したゲストハウスに三つのグループに分かれて宿泊した。京都訪問企画班のメンバーが京都に事前訪問して選定してくれただけあり、どこもなかなか風情ある素敵な町家で、日仏双方のメンバーに好評であった。

Nous sommes partis le sourire aux lèvres pour le point d'orgue du programme : le séjour à Kyoto. Nous avons pris le Shinkansen puis nous sommes arrivés à Horiba, fleuron de l'industrie japonaise spécialisé dans la fabrication d'instruments de mesure. Nous avons pu nous rendre compte de l'importance de ces appareils et du haut degré de technologie qu'ils contiennent. Nous avons eu la chance de comparer des chocolats américain et japonais qui différaient par leur densité, invisible à l'œil nu, et qui influait sur leur ressenti en bouche. Des éclats de rire ont aussi fusé quand un pH-mètre, présenté comme incassable, fut brisé par un membre pourtant bien intentionné. Il fut fort heureusement remercié par l'entreprise pour sa contribution avec un stylo.

Après avoir découvert l'excellente auberge de style traditionnel où nous avons séjourné, nous sommes allés sur des berges pour le hanabi. Cette féérie nocturne m'a ravi car nous avons pu célébrer la joie d'être ensemble dans cette ville magnifique. Ensuite, nous sommes allés à plusieurs au karaoké, ce qui a ravi les membres français. Nous avons pu chanter des succès américains et profiter de l'atmosphère unique du lieu, qui tranchait avec les autres aspects de Kyoto. Cette journée bien remplie fut un vrai plaisir pour moi, et constitua un prélude délectable à la suite du séjour.

8 月 13 日（水）

京都二日目。二つのグループに分かれ金閣寺を見学した。北山文化を代表する建築物である舎利殿のきらびやかな姿に、フランス側メンバーはもちろん、日本側メンバーも感動している様子だった。舎利殿以外にも、龍門滝や夕佳亭など、中にはメモをとりながら熱心に拝観するメンバーもいたほどだった。また、道中にあったちりめん細工のお店でも、日本ならではの素材を使った「カワイイ」を見つけることができた。

Le deuxième jour à Kyoto, le 13 aout, on a visité le Pavillon d'or (Kinkakuji). Le Kinkakuji se trouve sur la liste du patrimoine mondial de l'UNESCO . Le temple était remarquable – le type d'endroit qu'il ne suffit pas de regarder en images, mais qu'il faut surtout visiter. La structure fait partie du paysage de manière organique. Le phoenix au dessus du toit contrastait avec d'autres oiseaux vivants penchés sur l'île où se trouvait le temple.

Le soir on est allé dîner à Gion, dans un restaurant de cuisine traditionnelle de Kyoto. Le repas comprenait 6 plats, qui étaient petits mais surtout délicieux.

La deuxième journée à Kyoto était pleine de choses surprenantes et insolites.

8 月 14 日（木）

木格子の窓から吹き込むひんやりとした朝の空気に夢から現へと引き戻される。そして京都訪問もついに最終日だという現実に気づかされる。日本の伝統や文化を寝食はもとより呼吸すらからも感じることのできた京都訪問は、私たち日本側にとっても日本を再考する非常に良い機会となった。そんな最後の京都を全身で感じながら京都大学 iPS 細胞研究所へと向かう。古都の風情を残しながらも日本を代表する研究拠点たる京都大学 iPS 細胞研究所では、日本の伝統と学術の融合を感じるとともに、iPS 細胞研究という最先端の科学に触れることができた。また日本の伝統の中にありながらも、従来の閉鎖的な研究室とは一線を画し研究者同士が自由に議論や交流できるようにと考えられた仕切りのないオープンラボは画期的で魅力的であった。午後には帰京の時間が迫る中、各自思い思いの昼食を食べ京都駅へと集合する。そして夢のような非日常は新幹線の発車音とともに終わりを告げた。

Dernière journée de notre excursion à Kyoto, la matinée a démarré avec le rangement de nos affaires et la sortie des valises. En remerciant nos hôtes pour leur accueil chaleureux, nous sommes rapidement partis des hôtels, afin de rejoindre les autres groupes au CiRA (Center for iPS Cell Research and Application).

Etabli depuis 2010, CiRA est un centre de recherche de médecine et de biologie moléculaire et cellulaire, affilié à l'université de Kyoto. Il a été fondé en conséquence des découvertes de son actuel directeur, le docteur Shinya Yamanaka, qui a montré en 2006 qu'il est possible de reprogrammer des cellules adultes en cellules souches pluripotentes.

A travers une présentation du centre, nous avons pu voir le large panel de recherche, allant de la biologie fondamentale aux applications cliniques, sur lequel travaillaient les chercheurs afin d'utiliser la technologie des cellules iPS pour la guérison de nombreuses maladies humaines. Puis, nous avons eu la chance de visiter également les laboratoires et constater le milieu d'excellence de ces derniers, dans lequel nous avons rencontré un doctorant français, venu faire sa thèse de recherche de neurobiologie à Kyoto.

Le dernier après-midi à Kyoto a été consacré à un temps de repos autour d'un repas pris dans une atmosphère conviviale autour d'une petite rivière, avant de rejoindre le Shinkansen pour rentrer à Tokyo.

8 月 15 日（金）

京都訪問から東京へ帰ってきたその翌日、興奮も冷めやらぬまま、午前・午後合わせて企業にお邪魔させていただいた。

午前の訪問先は、全日本空輸 (以下 ANA) だった。航空各社の整備場や関連企業の集まる東京モノレールの「新整備場」駅にある ANA 機体メンテナンスセンターにて、機体整備場の見学の後、社員の方々による ANA、及び同社の展開するウェブサイト「IS JAPAN COOL?」に関する紹介・解説をいただいた。

日頃立ち入ることのない機体整備場の見学が新鮮で刺激的な体験となったことはもちろん、日本の文化を新しい形で海外へ発信する「IS JAPAN COOL ?」に関するお話は、日仏の文化交流のあり方を模索する上で考えさせられることの多いもので、非常に有意義であった。

Nous avons passé la matinée à l'aéroport d'Haneda, où nous avons été accueilli par le personnel d'ANA (All Nippon Airways). Cette compagnie aérienne a récemment créé le site internet « Is Japan cool ? » (www.ana-cooljapan.com), qui présente le Japon traditionnel et moderne en proposant aux visiteurs d'aimer ou non différents aspects de la culture nippone après y avoir été exposé par de courtes vidéos et articles. Nous avons présenté par groupe devant le créateur de ce site, ce que nous pensions pouvoir être estampillé « cool » dans la ville de Kyoto. Cela allait des ventilateurs aux enseignes présentant du franponais. Puis, tous parés de casques de sécurité, nous avons eu droit à une visite des ateliers d'entretien des avions.

8 月 16 日（土）

この日は午前・午後共に日仏会館でディスカッションを行った。翌日にいよいよシンポジウムを控え、各班はそれぞれ議論を深めながらも発表に向けた準備に取り掛かり皆真剣な面持ちだった。今回のシンポジウムでは資料を両言語で表記し、日本語で発表を行ったため、各班の日本側･フランス側メンバーは共に協力しながら準備を進めた。会議室ではフランス側メンバーの日本語のスピーチの練習をしている声が時折聞こえてきた。今まで深めてきた議論を発表用の資料に盛り込む作業を進めていき、少しずつ出来上がってくる資料を目の前にすると期待が高まっていった。ディスカッションの内容を発表時間内にどのように盛り込み、わかりやすく伝えるかをメンバー全員で考える過程は非常に有意義なものだった。どの班もディスカッション終了予定時刻よりも長く残って最終調整を行っており、翌日のシンポジウムでの成果発表を非常に楽しみに感じた。

Cette journée aurait pu être la plus ennuyeuse, puisqu'à la veille du symposium, elle a été entièrement consacrée à sa préparation. Je me souviens avoir quitté ma famille d'accueil de bonne heure en achetant au passage une bouteille d'1 litre de café glacé, tant à cause de la chaleur qui allait venir qu'à cause de la fatigue. Mais notre groupe a été véritablement galvanisé par l'approche du symposium et nous avons redoublé, sinon décuplé, d'efficacité. En particulier, Marina, qui était restée légèrement en retrait depuis le début des discussions, s'est révélée pouvoir travailler avec une très grande intensité à l'approche d'un événement important. Nous avons fini de réaliser les échantillons de carte pour notre jeu et d'écrire les règles dans les deux langues. A midi, nous avons acheté des onigiris au magasin de proximité le plus proche de la MJF que nous avons mangés à notre bureau, presque sans s'arrêter de travailler. Le soir, nous avons voulu imprimer les cartes à jouer, mais confrontés à des problèmes logistiques, nous avons dû repousser cette impression au lendemain matin, dans une proche reprographie.

Autour de nous, tous les groupes étaient en ébullition. Alors que pendant certaines journées de discussion, on pouvait parfois percevoir une certaine lassitude, ce dernier samedi a mobilisé toutes les forces qui nous restaient. Pour la plupart d'entre nous, le retour à la famille d'accueil s'est fait calmement, pour un bon repos avant le symposium.

8 月 17 日（日）

シンポジウム当日。メンバー一同、フォーマルな姿に身を包み、午後に控えたシンポジウムに向けて、朝一番から会場の設営やリハーサルなどを行った。開始の時間が近づくにつれてメンバーの緊張感が増してくる。会場は満員。そして気が付くとシンポジウムが始まろうとしていた。シンポジウムでは両国の代表挨拶から始まり、東京と京都のプログラムを報告した後、二週間にわたって重ねてきた熱いディスカッションの成果を発表した。私は、ディスカッション担当としてシンポジウムを仕切らなければならない立場にあり、緊張と不安があったが、メンバーにフォローされながらなんとかシンポジウムを進めることができた。シンポジウムの後は、ホストファミリーとフェアウェルパーティーを実施した。二週間という短い時間であったが、各ホストファミリーとフランス側メンバーはまるで本当の家族のように見えた。

La journée du symposium de cette année m'a semblé tout à fait pareille à celle de l'année dernière : depuis le matin, les groupes se rejoignent pour finir leurs présentations de slides, mémoriser leurs paroles, arriver giri-giri à finir leurs préparations. Dans mon groupe (Gender Roles), on avait préparé un questionnaire et venait d'obtenir les résultats, de sorte qu'il nous fallait finir d'analyser ces données et en obtenir des résultats concrets. Ainsi une partie de notre groupe travaillait sur les données, pendant qu'une autre préparait leurs paroles (surtout parce que les présentations sont forcement en japonais, indépendemment si on parle ou pas la langue !). Je me souviens d'avoir fini d'écrire le PowerPoint quelques minutes avant le début du symposium, qui a eu lieu au sous-sol de la Maison Franco-Japonaise – ce qui impliquait aussi que j'improvise lors de ma fois à présenter, puisque je n'avais pas de paroles fixées !

À la fin, tel que l'année dernière, le symposium fut une occasion de voir les résultats du travail continu de nos collègues, ainsi que, bien entendu, de recevoir des critiques. Tous étaient fatigués de cette longue journée, mais nous savions qu'il y aurait un déjeuner ensemble le lendemain pour finir officiellement le programme.

8 月 18 日（月）

シンポジウムも終わり、二週間のプログラムも残すところあと二日。フランス側メンバーと日本側メンバーでの 14 期合同会議を早稲田大学で行った。14 期だけでの全体会議はこれが初めてであり、とても新鮮な気持ちだった。会議では主に今回の来日プログラムの振り返り、来年の渡仏プログラムに向けた取り組み方針、そして今後の活動方針について、両国で意見交換を行った。彼らと共に次期の日仏学生フォーラム (FFJE) を担っていくことを再確認した時間でもあり、これまで先輩方が築いてきたものを更にパワーアップさせて次世代へと引き継いでいかなければ、と引き締まる思いがした。

その後 13 期メンバーと合流しての昼食会が、全体で過ごす最後の時間となった。プログラムの全日程を無事に終えられた清々しさと同時に、密な交流を重ねてきたフランス側メンバーとの別れが近付いていることを実感した。昼食後は日本側メンバーの用意したメッセージカードを渡し、別れを惜しんだ。何度も何度もハグをして、再会を誓い合った。

Le symposium est à présent dans les mémoires et une dernière photo souvenir a officiellement clos le programme 2014. C'est donc pour préparer le futur que les membres de la 14e Génération se sont réunis dans l'enceinte de l'Université Waseda. La personne qui m'a attribuée le rapport de cette journée a eu du flair, puisque fraîchement élue de la veille, j'ai eu le grand honneur de co-présider la réunion avec ma partenaire japonaise, Kurumi.

L'équipe débriefe joyeusement sur les dernières semaines passées en ensemble. La partie française acclame unanimement l'accueil extraordinaire reçu par les japonais, tandis que ces derniers sourient doucement comme pour nous dire « Ah ? Vous en doutiez ? ». Ces deux semaines sont donc passées d'un seul souffle et certains regrettent que le programme n'ait pas été un peu plus aéré. Les enseignements et les bonnes idées sont soigneusement consignés par les deux secrétaires généraux.

Un ultime déjeuner en commun vient sceller les adieux. L'ambiance est à la fête mais on aperçoit quelques larmes au coin de l'œil. Les Français rentreront chez eux les valises alourdies par les souvenirs et la responsabilité de faire aussi bien. La réponse l'an prochain !

8 月 19 日（火）

プログラム最終日。19 日のフライトで帰国するメンバーを日本側メンバー数名で空港で見送った。空港では、お土産を買ったり、プログラムを振り返ったり、そして最後の和食としてうどんやそばを食べた。これまで毎日顔を合わせていたためか、出国するまで、メンバーと別れプログラムが終わってしまうことが信じられなかった。「また明日も会えるような気がする」とフランス側メンバーに話したら、「フランスなんて近いよ」と答えた。確かに、日仏学生フォーラム (FFJE) に携わってから、フランスは自分にとって近い国となっていた。

14 期フランス側メンバーは、「次の渡仏プログラムでは、今年の来日プログラムに劣らぬよう、企画をがんばるので楽しみにしていてね」と言ってくれた。感謝の気持ちを次につなげていくことができる、FFJE の良さに改めて気付かされた。3 月の渡仏プログラムに参加する 14 期メンバーを少しうらやましく思いながら、任期を終えても日仏両国に携わっていきたいと意を新たにした。